

〔第31回学術集会 家族会企画 指定講演〕

自助グループとしての家族会

上智大学総合人間科学部社会福祉学科

岡 知史

「専門職と家族のコラボレーション」を実現するために、専門職が留意すべきだと私が信じる3つのポイントについて語りたい。

まず、当事者としての個々人の家族と、自助グループとしての家族会を区別する必要がある。このセッション名も「専門職と家族のコラボレーション」ではなく、「専門職と家族会のコラボレーション」であっても良かったと思う。専門職は、その基本的な性格から、常に組織・集団の一員として動く。専門職の知識も技術も、長い専門職の歴史において産み出され蓄積されたものであり、個人的な努力の所産ではない。このような集団としての専門職と協働（コラボレーション）していくためには、当事者も個人ではなく、集団である必要がある。なぜなら当事者が個人であれば、集団としての専門職に「吸収」され、専門職の「補完的な役割」を担うこととなるからだ。多くのピア・サポーターと呼ばれる当事者は、そのような存在である。そのピア・サポートの意義を否定する意図は私には全くないが、それと当事者の集団である自助グループの意義とは異なる。自助グループが求めるのは専門職との「協働」であり、専門職の「補完」ではない。

次に、自助グループが産み出す「体験的知識」と、専門職がもつ「専門的知識」は、基本的に性格が異なり、その使い方も全く違う。自助グループの「体験的知識」は、自分自身の体験で得た当事者個

人の「体験的知識」と混同されることがあるが、これも上記で述べた「個人としての当事者」と「当事者の自助グループ」を区別していないことから派生している。「専門的知識」は、多くの事例を積み重ね、検討することによって最適の解決法を特定する形をとるとすれば、当事者の自助グループは集団として多くの当事者のナラティブ（物語）を蓄積するが、そのナラティブの無限の多様性を残したまま、最適なものの選出は、それをうまいようにする当事者それぞれに、そのつど委ねる形になる（それに対して、当事者個人の「体験的知識」には、そのような多様性が欠落している）。さらに「専門的知識」は、専門職の能力や権威を高める方向に拡大していくが、自助グループの「体験的知識」は、逆に当事者のエンパワメントを促進していく。当事者と専門職の力のバランスから考えれば、ふたつの「知識」が衝突することも考えられる。

最後に、家族会は、患者本人の代理人の会ではなく、家族を当事者とする会（家族本人の会）である。患者が幼児であったりすれば、家族は当然、患者の代理人になるわけだが、家族会の基本は、家族を「本人」とする当事者の会であり、代理人の会ではない。患者にしかわからないことは多くあるが、同様に、家族にしか共感できないこともある。家族会が、患者の代理人の会になってしまうと、家族は家族会においても疎外感を覚えてしまうだろう。



researchmap.jp/famfamio
https://researchmap.jp/famfamio/misc/7787034